

## Special Essay

### 携帯電話と読書

看護学科

野村 志保子

最近、小中学校の携帯電話の持ち込み禁止、また政府の「小学生、中学生は携帯電話を持たないように指導」など、青少年の携帯電話の所持、使い方などについて論議が盛んに行なわれている。看護学科でも授業開始にあたって、「授業中には携帯電話を使用しないこと！」を約束事に掲げる教員もいる。ある地方都市で行なわれた調査によると、一日3時間も携帯電話で友人と話している高校生も多いという。その一方、「携帯電話の功罪」について、“直接、友人や家族と向かい合って話し合うことが少なくなった。携帯電話の使い方を間違えているのではないか。学校内で何か規制を設けたほうがよいのではないか”などの意見もあるという。

上京して電車に乗るたびに、いつも異様に感じる光景がある。それはほとんどの乗客が携帯電話を睨みながら、ひたすら親指を動かしていることである。以前、東京で暮らしていた頃の車中は、老若男女を問わず本を読む人ばかりで、身動きできないようなラッシュ時間でも吊革にぶら下がりながら片手に本を持ち、無心に読んでいた。私にとっても朝夕の1時間余りの通勤時間は、楽しい読書のひとときだった。

大学内でも、数年前までは小説や詩集をもっている学生がいたが、今は携帯電話を肌身離さず握りしめている。お札が沢山入った財布を置き忘れることはあっても、携帯電話を置き忘れることはほとんどない。決して携帯電話を不要だとは思わないが、読書を通して思索にふけったり、心を癒されたり、至福の時間を味わったりする経験をしないで、一度しかない青春の日々を過ごすなんて、何と“もったいない”ことかと思うこの頃である。

学生の本離れが図書館までの道のりを遠くしているのかもしれない。図書館は“大学の顔”ともいわれる。優秀な看護師を数多く輩出している某看護大学の図書館を訪れたとき、眼をみはるほど多くの学生が勉強したり、調べ物をしていた。本学の学生が一人でも多く、夕暮れの図書館で静謐な学習や読書の時間を過ごし、言葉では言い表されないような満たされた気持ちで図書館を出ていく、そのような体験を是非味わってほしいと願っている。

